

文化

表紙をめくると、西田千太郎展として8枚の写真が載った第1号が目に入る。去る3月26日から5月31日まで、小泉八雲記念館で行われた「三三展示」の写真版である。この展示については、内田融(以下敬称略)「西田千太郎没後120年記念三三展示の開催」が本文中で詳述している。



「へるん」54号の表紙

「耳なし芳一」原文を検証

＜常松 正雄＞

「へるん」54号を読む

「高橋虫麻呂補鳥伝説とラフカディオ・ハーン『夏の日の夢』(4)」「錦織浩文」、『ラフカディオ・ハーン文学を説く』(7)―The Story of Mimi nashi Hoichi の場合―(中田賢次)、「ハーンとトルストイ」(八)―ハーン・小山内薫、島村抱月―「芸術論」受容の視点から―(黒柳大造)は、それぞれ連載を通してハーン文学のある特殊な面や作品の理解を深めさせてくれる。

とりわけ中田の「耳なし芳一」の英文原文テキストの詳細な検証を通じた論考は、誠に読み応えのある力作である。その他の8編も、文学的、あるいは、語学的に、ハーン文学のさまざまな面にメスを入れて読者を啓発してくれる。

例えは「位牌になった小泉八雲―ハーン文学における i h a i の重要性」(横山孝一)は、「ラフカディオ・ハーン」の日本時代の仕事で、怪談の再話と並ぶ功績は、わが国の宗教、とりわけ位牌の前で営まれる祖先崇拜の意義を明らかにしたことだと述べて、論を進めている。その他小泉凡は、「ハ小泉八雲記念館」再発見 この逸品(19)アイルランド時

「ハルンゆかりの人々ゆかりの地」のジャンルでは、前記内田の「三三展示」紹介記事の他6編のエッセイが載っているが、「生まれ変わった小泉八雲記念館から」(小泉凡)は、館長小泉が、「リニューアル」を「リニューアル」の「概略」とそのめざす方向について紹介したエッセイで、「一読を勧めたい一編である。」

「未刊行資料・埋もれた資料(30)」数編のなかでは、「小泉一雄宛平素子書」ラフカディオ・ハーンと六人の日本人(丹沢栄一)が、池田記念美術館所蔵の書簡・葉書2通を紹介し、「望」の両方で詳しく取りをらを読み解くと、「呈性を探し、その作品を全122封にわたる他の論文等を、スベースの都合で割愛せざるを得なかったのは誠に残念であるが、全編を読み終えて、本誌が、研鑽を続ける会員諸氏の研究成果発表の場として、また八雲研究全般にわたる情報を提供する年刊誌として、ますますハーン研究の視野を広め、探究を深めている立派な「研究・情報誌」であるという感を深くした。(島根大学名誉教授)

「へるん」54号は、八雲会刊、1300円。

「高橋虫麻呂補鳥伝説とラフカディオ・ハーン『夏の日の夢』(4)」「錦織浩文」、『ラフカディオ・ハーン文学を説く』(7)―The Story of Mimi nashi Hoichi の場合―(中田賢次)、「ハーンとトルストイ」(八)―ハーン・小山内薫、島村抱月―「芸術論」受容の視点から―(黒柳大造)は、それぞれ連載を通してハーン文学のある特殊な面や作品の理解を深めさせてくれる。

「高橋虫麻呂補鳥伝説とラフカディオ・ハーン『夏の日の夢』(4)」「錦織浩文」、『ラフカディオ・ハーン文学を説く』(7)―The Story of Mimi nashi Hoichi の場合―(中田賢次)、「ハーンとトルストイ」(八)―ハーン・小山内薫、島村抱月―「芸術論」受容の視点から―(黒柳大造)は、それぞれ連載を通してハーン文学のある特殊な面や作品の理解を深めさせてくれる。

「高橋虫麻呂補鳥伝説とラフカディオ・ハーン『夏の日の夢』(4)」「錦織浩文」、『ラフカディオ・ハーン文学を説く』(7)―The Story of Mimi nashi Hoichi の場合―(中田賢次)、「ハーンとトルストイ」(八)―ハーン・小山内薫、島村抱月―「芸術論」受容の視点から―(黒柳大造)は、それぞれ連載を通してハーン文学のある特殊な面や作品の理解を深めさせてくれる。

朗読 音楽で小泉八雲作品

佐野史郎さん 山本恭司さん 興雲閣(松江)で10月 パフォーマンス



小泉八雲朗読のしらべ
のチラシ

松江ゆかりの文豪・小泉八雲の作品を題材に、松江出身の俳優佐野史郎さんとギタリスト山本恭司さんが共演する「小泉八雲朗読のしらべ 幻々夢とうつつのあわいに現れるものたち」が10月1日、同市殿町の興雲閣で開かれる。8月1

日にチケット販売を開始した。

全国各地や海外公演も行う朗読パフォーマンスで、言語や文化の壁を超えて高い評価を得ている。11年目の今回はタイトルを改め、1作目を再構成した。八雲のひ孫で島根県立大

短期大学の小泉凡教授が監修と第1部の講演を務める。

地元の官民でつくる神在月まつえ文化・観光月間実行委員会が主催する。

開演は午後5時半で、全席自由の150席。入場料は前売り3500円(当

日4千円)。未就学児は入場不可。チケット販売は、イープラス、チケットぴあ(PCコード636482)で取り扱う。問い合わせは松江市観光文化課、0852(55)5517。

トレジャー（中央）を狙って激しい攻防を展開する選手



スポーツ鬼ごっこ白熱

鬼ごっこを競技化した「スポーツ鬼ごっこ」の県大会が11日、松江市浜乃木7丁目の県立天短期大学部松江キャンパスであり、小学生150人が自慢の脚力やチーム力、戦術を駆使しながら熱戦を繰り広げた。
(井上誉文)

県大会 小学生16チーム 脚力や戦術駆使

スポーツ鬼ごっこは1チーム7人制で、前後半各5分で実施。相手にタッチされないようにコート（縦24メートル、横16メートル）内を走りながら、敵陣にある筒状の「トレジャー（宝）」を取った回数で競う。大会は中国地方唯一の公認大会で、しまね鬼ごっこ協会が開いた。

戦。自陣のトレジャーを守りながら縦横無尽に走り回り、おとり役の選手が相手陣営をかき乱す間に別の選手がトレジャーを狙うなど、練り上げた戦術で勝利を目指した。

低学年の部は中央児童クラブ（松江市）、高学年の部はシャイニングブレイブス（同）がそれぞれ優勝し、11月に東京都内である全国大会の出場権を獲得。

松江

「私たちのすきなわらべうた」

開催によせて

〈梶間 奈保〉

皆さん、こんな経験はないだろうか。「お寺のおじいさんが、かぼちゃの種を手まきました。芽が出て、くちんで、花が咲いて、実がなると…」この辺りから「忍法使って」こが花が咲いて、じゃけんポン」と、歌の内容や終わり方が出身地域、あるいは子どもに下りて違いがあることに気づく。それはそれで面白くなりもする。

私がわらべうたの魅力を挙げるならば、わらべうたの「可変性」だろうか。音楽作品のように速さやリズムが指定されているわけではなく、テレビゲームのようにルールの制限があるわけでもない。もちろん、それぞれのわらべうたにはメロディがあり、歌いながらお手合わせをしたり、縄を跳んだり一定の遊び方がある。しかし、それは前述したように、人により地域により異なる遊び方へと変化し、自分の都合に沿いながら、わらべうたを変化させられる便利な遊び

来月3日、出雲でイベント 変化自在に根付く文化

とはいえ「わらべうた」と聞くと、ついで「昔」というイメージを呼び起こしてしまふ。一つは自身の幼少期に遊んだ記憶である昔



トクシキナサの好参加者として、酒井美奈氏、井上アツタ氏、寺尾紗穂氏と「わらべうた」を遊ぶ。

を、そしてもう一方はひと昔前の遊びとして捉えてしまいがちである。確かに、学生に尋ねると、わらべうたが何だったのかあまり覚えていない。また、民族音楽学で有名な小泉文夫(1907~1983年)も約50年前に小学校教諭からわらべうたで遊ぶ子はほとんど見られないと言われたという。わらべうたを一般的な遊びではなく、かつての遊びとして位置付けている。しかし、わらべうたは小学校の音楽の教科書にいくつか掲載されており、子育て本の中にもしばしば登場する。私たちはわらべうたを通して教育的価値を見いだすこともあれば、日本人の根底の部分に必要不可欠なものとして、語り継ぐこともある。わらべうたは、いわば変化自在の文化として今もなお根付いているのではないだろうか。

さて、来る9月3日に、山陰のわらべうたの研究でも有名な酒井重美先生が大変興味深いイベントに参加される。酒井先生とわらべうたについて話をしたとき、ご自分の研究について「過去のわらべうた」、そして、対談される寺尾氏に「現代のわらべうた」と紹介されたのが印象的であった。わらべうたは、変化自在としながらも、30年もの間も変わらぬ歌い継がれているものもある。それはまさしく、過去の産物であり、酒井先生をはじめ多くの研究者から受け継がれた恩恵でもある。

一方の寺尾紗穂氏は「評伝川島芳子」などの著書を通して教育的価値を、いわば「変化するシンガソンのグライダー」である。寺尾氏の「私の好きなわらべうた」を聴いてみると、私のわらべうた観を絶妙に崩してくれ、わらべうたは基本的に、ある一定の音程で構成されているため似ているものが多い。そのため、わらべうたを音楽作品にまとめようとすると、ノスタルジアを感じる。まさに「過去を思い返してしまふ」それが、わらべうたをパッキングとしてまとめた時の良さであり、デメリットでもある。もちろん、寺尾氏の作品の中にもわらべうたの良さである郷愁がにじみ出ている。それにミニマルな音の粒が集まり、新規なわらべうたとして生まれ変わっている。それは、縄やお手合わせをしながら遊ぶ姿ではなく、音そのものを通して遊ぶという、新しいわらべうたの遊び方のスタイルともいえよう。

新たに命を吹き込まれた現代のわらべうた。そして脈々と人の声を通じて歌い継がれた過去のわらべうた、それらが交差する日を楽しみにしている。

(島根県立大短期大学部 講師)

寺尾紗穂、酒井重美の両氏によるトーク&ライブセッション「わたしたちの好きなわらべうた」が、9月3日午後2時、出雲市知井宮町の出雲民芸館である。有料。問い合わせは、同民芸館、電話0856-2216667。

県立大と中小企業家同友会協定 人材育成や共同研究



覚書を交わし、握手する清原正義理事長(左)と小田隆弘代表理事

県立大(本部・浜田市野原町)と県中小企業家同友会はこのほど、包括的連携協定を結んだ。同大が2018年4月に新学部を開設することを踏まえ、学生のキャリア教育や産学連携で協力していくのが狙い。

同大は18年度、四年制の人間文化学部と看護栄養学部を新設する計画で、地場企業と連携して人材育成や共同研究を進めることにし、同大が経済団体と連携

協定を結ぶのは初めて。同友会には県内の製造業や流通業、ソフトウェア開発などの経営者228人が加盟。各社の従業員らを講師として派遣するほか、学生の就業体験(インターンシップ)を受け入れる。

同大短期大学部松江キャンパス(松江市浜乃木7丁目)であった調印式で、同大の清原正義理事長は「公立大学として人材の育成や供給、研究で地域社会と連携を深めることが重要だ」と述べた。同友会の小田隆弘代表理事は「人手不足が進む中で、企業が地元大学

に寄せる期待は大きい。地域の将来のため協力していきたい」と語った。(古和隆宏)

ちんちん小袴 公演によせて

〈小泉 凡〉

「ちんちん小袴。夜も更けて候よ。お静まれ姫君。やあとんとん」

狂言師茂山千五郎のふしぎな言葉がアイルランドの劇場に響き渡ると、会場は笑いの渦に包まれていく。これは小泉八雲原作「ちんちん小袴」(「日本昔話集」所収)の一節で、使った爪楊枝を捨てずに畳の縁に押し込んでいた怠け者の姫珍しい。



茂山千五郎家による狂言「ちんちん小袴」―茂山千五郎家狂言アイルランド公演実行委員会提供

今年には日本とアイルランドの外交関係樹立60周年にあたり、両国をつなぐ作家、小泉八雲の「ちんちん小袴」が初めて新作狂言となり、このほどアイルランドのダブリン、スライゴ、ウォーターフォードの3都市で上演された。さらにアイルランドの国民的詩人、劇作家のウィリアム・バトラー・イエイツ原作の狂言「猫と月」、それに古典狂言の「蟹山伏」も演じられた。

イエイツは、子ども時代に親しんだ北西部スライゴ地方の妖精伝承を採集した「ケルトの薄明」(1889年)を上梓。そこに綴られた家つき妖精の話は、まさに「遠野物語」の執筆計画を練っていた柳田國男にザシキワラシとの共通点を見いださせた。イエイツの戯曲作品「鷹の井戸」に基づく新作能「鷹姫」も今年、東京で上演されている。八雲は当時、若きイエイツを妖精文学の最高峰として東大の授業でとりあげ、日本ではもっとも早い時期に紹介していた。そして1901年9月には「私にはゴナハト(アイルランド北西部の地名)出身の乳母がいて妖精譚や怪談を語ってくれたので、私はアイルランドの事物を愛している」と家族にも漏らしたことがないアイルランドの文化環境への共感と愛情をイエイツに告白した。



茂山千五郎家の皆さんと舞台上で写真に納まる筆者(手前右から3人目)―茂山千五郎家狂言アイルランド公演実行委員会提供

八雲原作の新作狂言 アイルランドに笑いの渦

周年の中心的行事の一つと位置付け全面的な協力を行った。ダブリンとスライゴでは、早々にチケットは完売し当日券を目指した日本ファンを失望させた。終了後の感想やアンケートからは「エクセレント!」「衣装が見事!心から楽しめた」「もっと見たい!」マイクな

滞在中に訪れたダブリン作家記念館では、館長のロバート氏自らの手作りによる小泉八雲展が開催中で、松江の小泉八雲記念館の企画展「文学の宝庫アイルランド」との同時開催が実現したことも喜ばしい出来事だ。文学や文化の社会資源としての可能性を再認識する訪問となった。

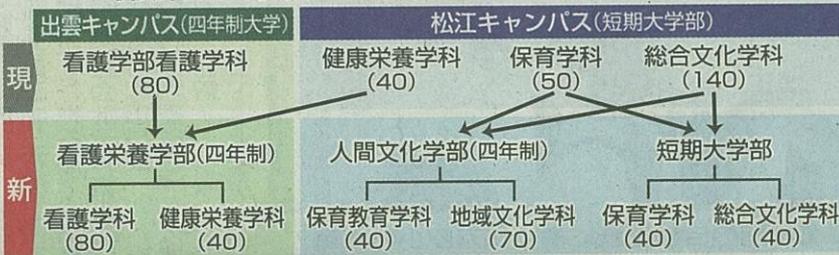
狂言の凱旋公演は、10月7日に滋賀県彦根市、11月28日に松江市の島根県民会館で行われる。

(鳥根県立大短期大学部教授)

してなぜ劇場に響き渡る声が出せるの?」など、強い感興を呼んだことが分かる。中には「日本のシャン・ノース」と評価した観客もあった。シャン・ノースとは、一般に古いスタイルのアイルランド伝統音楽の歌唱法のこと、口承で伝えられ、曲より詞を重んじ、歌のリズムも詞で決まるといった傾向があるようだ。「猫と月」や「ちんちん小袴」の語がそれを連想させたのだろう。実際、狂言も安土桃山時代に書承されるまでは口伝が中心だったと言われる。狂言は、アイルランドの基層文化の中核を占める伝統音楽とも響きあったようだ。

島根県立大学松江、出雲キャンパスの再編

※()内は定員



島根県立大(本部・浜田
市野原町)は29日、松江キ

2学科構成 松江に来春開設

「人間文化学部」認可

文科省

島根県立大(本部・浜田市野原町)は29日、松江キャンパス(松江市浜乃木7丁目)で予定する四年制の「人間文化学部」の設置が文科科学省に認可されたと発表した。保育教育、地域文化の2学科で構成し、来年4月に開設する。現行の短大部は定員を減らした上で保育、総合文化の2学科が存続する。

設置主体の県は、健康栄養学科を含めて松江キャンパスの3学科全てを四年制化する方針だったが、県議会から短大需要があるとの指摘を受けて短大部を残した経緯があり、四年制、短大部ともに志願者が集まるかが今後の焦点となる。

人間文化学部の定員は110人。保育教育学科(定員40人)は小学校教育も担える人材を育成する。地域文化学科(70人)は、幅広い職業に対応できるキャリア支援力を入れる。

短大部の保育学科と総合文化学科の定員は各40人で、それぞれ10人減、100人減となった。

40人の健康栄養学科は四年制化し、出雲キャンパス(出雲市西林木町)へ移転。四年制で80人の看護学科と統合し、120人の看護栄養学部で改編する。名称変更のため、国の認可は必要ない。

県立大の清原正義理事長は「学生や県民の期待に応えることのできる魅力ある大学となるよう改革に取り組む、地域と共に発展する大学としてさらなる進化を遂げたい」、溝口善兵衛知事は「地域を担う高度な専門性を有する人材を育成、輩出し、地域に貢献していくことを期待する」とのコメントをそれぞれ出した。

県は四年制化に伴う初期費用として約47億円を見込み、新棟建設や施設改修などを進めている。

(尾添大介)

日アイルランド交流貢献

小泉さん夫妻 外務相表彰

松江市長に報告



外務大臣表彰の受賞を報告する小泉凡さん(中央)と妻の祥子さん(右) 松江市長に報告

松江市のゆかりの文豪・小泉八雲(1850〜1904年)のひ孫で、島根県立大短期大学教授の小泉凡さん(56)と妻の祥子さん(57)が7月、日本と、八雲が幼少期を過ごしたアイルランドの文化交流に寄与したとして外務大臣表彰を受けた。30日、松江市の松浦正敬市長に報告し、今後両国で八雲の魅力や功績などを伝えていくことを誓った。

夫妻は両国の文化理解を進める民間団体「山陰日本アイルランド協会」(松江市の立ち上げに加わった。市内で2007年から毎年開かれる、アイルランドのシンボルカラー・緑色の衣装などを身につけたパレードといった交流の機運や土壌をつくってきた。

一方、アイルランドに度々足を運んで民間交流を続

け、15年には八雲の人生を表現した「小泉八雲記念庭園」が現地に開園するなど、八雲や作品を核に文化交流の裾野を広げている。

松浦市長に対し、凡さんは「市や大学など多くの人と一緒に関わってきたことが評価された」と感謝。庭園開園など印象に残った思い出にも触れ「作家や作品が、観光や文化創造につながる社会資源になる可能性を実感した」とした。

祥子さんは、庭園に多くの人を訪れ、同国で八雲の作品を集めた企画展も開かれていることを紹介し「少しずつ八雲や日本への関心が広がっている」と喜び、活動継続に意欲を見せた。

夫妻はアイルランド日本大使館で表彰状を受け取った。

(岩井彩佳)